ただ一か所だけがまだ冬でした
それは庭の一番向こうの角で、
そこに小さな男の子が立っていました。その子はとても小さく
木のえだまでとどきません。ひどく泣きながら、木のまわりを
ぐるぐると回っています。かわいそうな木は、まだ、しもと雪
ですっかりおおわれ、北風はその上をふきあれておりました。

「のぼって。ぼうや」とその木
は言い、えだをできるだけだけ曲げ
て下ろしました。でも、その子
は、せが低くてどうしてもとど
かないのです。外を見ているう

ちに大男の心は雪がとけるようにやわらぎました。「わしはなんてわがままだったんだ」と大男は言いました。「春がなぜここに来ようとしらないのか、そのわけが今わかった。あのかわいそうな小さな男の子を木の上に上げよう、そしてかべをたたきこわそう。そうすればわしの庭はえいえんに子どもたちの遊び場所になるだろう」大男は自分のしてきたことを本当にこうかいたのです。そこで大男はそっと階だんをおり、静かに正面のとびらを開け、庭に入りました

た。しかし大男を見ると、子どもたちはこわくなって走ってにげてしまい、庭はまた冬にもどってしまいました。小さな男の子だけが走りませんでした。目になみだがいっぱい